

① 武蔵野市けやきコミュニティセンター

1 武蔵野市コミュニティ構想の取り組みー住民による『自主参加・自主企画・自主運営』

武蔵野市では、昭和四十六年に第一期武蔵野市長期計画の基本構想の一つとしてコミュニティ構想を掲げ、次のようなコミュニティについての基本的な考え方を示した。

- ①コミュニティは、市民自身が長期の自治活動の過程でつくるものである。したがって上からの制度的強制ではない。
- ②コミュニティは、地域の特性、市民交流のチャンスなどによって生まれてくるものであり、開かれた開放的都市空間をなしていく。したがって閉じられた閉鎖的都市空間ではない。

昭和四十八年に設置された第一期武蔵野市コミュニティ市民委員会は、コミュニティ施設整備の基本方針を市長に報告、市はこれに基づきコミュニティセンター条例を制定しコミュニティセンターの整備を進めてきた。

この結果、平成五年の第三期長期計画では、「コミュニティセンターの十七館設置が完了し、…これからは、市民が自らの力でコミュニティづくりを進めていく段階に入る。コミュニティセンターにおいては、三原則（自主参

加・自主企画・自主運営）を維持しつつ、本格的な地域活動が展開されることを期待したい。」という段階に到達している。

2 コミュニティセンターの建設と運営

武蔵野市コミュニティセンター条例では、コミュニティセンターは、「市民の社会生活の基礎単位であるコミュニティ地区ごとに配置され」、「市民のだれもが自由に利用できる多目的施設」で、「建設及び管理運営のすべてが、コミュニティ地区に居住する市民を中心とした市民参加方式により行われる」として

ている。

コミュニティ地区は、現在十一地区の区画割りになっている。コミュニティセンターは、当初は優先地区から整備を始めたが、その後住民の要望に基づいてコミュニティ市民委員会を設置を検討している。施設規模や配置のバランスを考慮して市民委員会で検討してきた結果、最終的に十一地区に十七館（百九十七千六百三十三平方メートル）と二つの分館が建設されている。

コミュニティセンターの建設は、住民の要望（ラフな設計）を受けて市が基本設計、実

施設設計を行っている。建設準備段階の住民側の組織づくりや意見調整は住民主導で行われ、行政は要請があった場合に会合に出席する程度である。周辺住民への周知のため、準備会によるニュースレターの発行を奨励している。

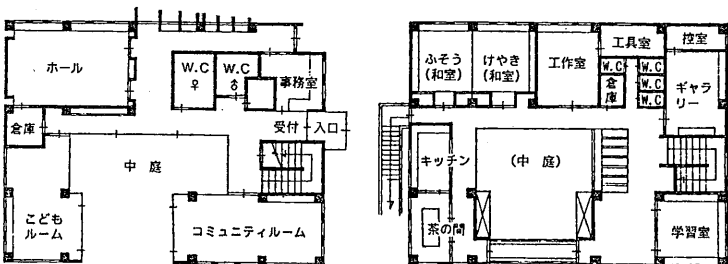
運営は、住民により構成されるコミュニティ協議会が市から委託され、補助金を受けているが、コミュニティの基本理念に反しない限り、かなり自主性が尊重されているようである。また横の連絡や研究のため武蔵野市コミュニティ研究連絡会が毎月行われており、地域の自主的なコミュニティ活動は、相互に刺激しあい、高められているといえよう。

3 ゴミ処理施設反対運動が発端となつたけやきコミュニティセンターの建設運動

昭和五十四年、市は中央北地区へのゴミ処理施設新設を発表した。施設予定地（吉祥寺北町）の住民はこれに反発し、「ゴミ問題を考える会」を発足、よりよい場所はどこかにして議論を進めた。市はこの運動を受け、ゴミ処理施設を中央北地区の緑町に移動させた。

「ゴミ問題を考える会」は、活動の過程で

けやきコミュニティセンター平面図（2階建、床面積576m²）



【基本設計/早川 洋】

データ

事業概要	「武蔵野市コミュニティ構想」に基づくコミュニティセンター設置事業
施設概要	敷地面積/832m ² 総床面積/576m ² ラーメン構造による2階建て
事業期間	1982年5月/中央北コミュニティセンター建設準備会発足 1984年11月/けやきコミュニティ協議会へ発展的移行 1988年6月/基本設計合意 1989年1月/着工 1989年12月/完成・オープン
参加形態と対象	住民有志による建設協議会、市主催の説明会

人的ネットワークや経験を広げ、自由に気兼ねなく利用できる活動の場が欲しいと考えるようになった。その時、武蔵野市のコミュニティ構想の存在を知り、その理念に刺激されて「今までにない、開放的でユニークなコミュニティセンターをつくらう！」と呼びかけ、昭和五十七年、「中央北コミュニティセンター準備会」が発足した。

その後中央北地区では、様々ないきさつから、コミュニティ市民委員会の答申によって、緑町、吉祥寺北町の両地域にコミュニティセンターをつくることが決められた。吉祥寺北町ではこれを受け、「けやきコミュニティ協議会」を新たに発足し、施設のイメージづくりを進めていった。

緑町には用地があり、早く建設が実現したが、吉祥寺北町には適切な土地がなく、時間がかかった。最終的には、昭和六十二年、市議会の承認を経て市の公園の一部を利用することが決定した（公園の代替緑地を別に確保）。

4 プラン確定まで

昭和六十二年六月、市は市民側に、年度内に着工するので十月までに市民の考え方をまとめるよう要請した。住民側は、用地が決まったことで施設づくりに新たな意欲を燃やし、独自に建築家を探し出して何度もスケッチを描いてもらい、十一月に住民側の最終案を設計図として提示した。

しかしこの案は、壁構造で外壁が入り組んでおりコストが高いことなどの理由から市は受け入れ難いとし、十二月に「市民の意向を

取り入れ」て市が設計案を提示した。しかし、市民側は自分達の構想とは異なるとしてこれを拒否し、一月、ラーメン構造を採用し、外壁の凹凸を減らしたプランを市に提示した。

これは一旦基本線で合意されたが、様々なやりとりの中で市と市民側の意見の食い違いがあり、一時凍結された後、三月、新たに市が案を提示した。しかしこれも市民は拒否し、

一月の合意案に基づく修正案を市民が提示し、いくつかの市の注文を受けて両者で検討する中で、昭和六十三年六月、ようやく基本設計の合意をみた。

実施設計の段階でも、市民側は自分達のイメージする空間づくりに非常に熱心に取り組み、内装の材料、設備、細かな空間構成など多くの要望を出し、市もできる範囲でこれに応じ、特に「若手の職員が積極的にアイデアを出してくれた」と市民側も評価している。

以上のようにプラン検討の過程はかなりグクシヤクしたものであったようだ。しかし、地域のコミュニティにとって快適な空間を生み出そうとする住民の熱意と粘り強い努力が、ほとんど無償で関わった建築家を動かす、また行政側の辛抱強い対応や若手職員の意欲を引き出して、結果的には市民・行政・専門家の協働となつて、けやきコミュニティセンターの優れた空間を生み出したと言えるだろう。

5 市民参加を促す理念と小さな行政単位

武蔵野市では、コミュニティ基本構想やコミュニティセンター条例で、コミュニティセ

ンターの理念や建設・運営についての住民参加の原則を大きく掲げており、これが意欲ある住民の自主的な取り組みを促している。

武蔵野市は行政規模が小さく、行政に、地域のキーパーソンや多くの市民の顔が見えており、ある程度地域の総意を反映しているかどうか把握できることも重要な要素であると考えられる。

さらに用地難から施設規模の標準化も困難で、標準プランや運営マニュアルはなく、行政も理念や原則に基づいて、個別に助言や行政としての意見を提示する形になっている。

このけやきコミュニティセンターの事例は、「コミュニティは、市民自身が長期の自治活動の過程でつくるもの」という基本的な考えが、コミュニティセンターの建設をめぐる市民と行政のやりとりで試され、ひとつの実を結んだものと考えられよう。

建設活動に係わった市民の意見

- ◎地域の合意づくり、客観的判断、思考の柔軟性、地域・利用者・住民の実情や要望の把握が大切。
- ・建設運動では、行政や議会への働きかけ、地域全体への広報活動、見学・学習、地域のまつりやコミュニティのつどいなどを長期的・継続的に行つたため、集団としての力量が高まった。
- ・この過程を通じて、住民間のつながりや信頼関係ができ、コミュニティづくりが進んだ。また、地域のように、住んでいる人々の実情・気分を肌で感じ、調べて知ることができた。さらに他のコミュニティセンターの使い勝手、運営の仕方を利用者・第三者として客観的に学べた。
- ・活動にあたっては、個人の自発的な参加（特定団体の利益・要望から出発しない自由な意思）と自由で平等な人間関係を尊重すること、その継続のためのしくみをつくることを重視した。
- ・また、話し合いや合意づくりに手間をかけた。
- ・施設づくりでは、アットホームで居心地のよい空間、「地域のリビングルーム」を追求し、同時に公共性（①様々な人の使い方を考えること、②誰にでも開かれること、③直接利用しない人への心配り、④町の中での情報の共有）も大切にされた。
- ・設計の際は、コミュニティづくり・まちづくりの拠点としてのセンターをイメージできること、そのイメージを設計者に伝えられること、住民のイメージを理解し具体化できる設計者との結びつきを得ることが大切である。
- ・行政に対しては、①住民を対等な相棒として考えること、②必要ときに適切な助言、情報、資料の提供、財政的支援を与えること、③住民の合意に基づいた注文を尊重し、実現できる柔軟性と質の高さをもつこと、を希望する。